



「ベルテラスいこま」オープニングイベント風景（本文中に関連記事があります）

目次／contents

ひと・まち・地域

「生駒らしい景観」の本質に迫る計画づくり～生駒市景観形成基本計画が策定されました
／坂井信行・絹原一寛・依藤光代 2

アルパックセミナー 都市における『農地を活かしたまちづくり』～都市と緑・農の共生に向けて～を開催しました（その1）
／岡本壮平・絹原一寛 4

地域の活性化×自分たちも楽しむ仕事＝よい仕事？～平成25年度の業務4本から～
／原田弘之・武藤健司 6

きんきょう

生駒に新たな賑わいスポット「ベルテラスいこま」がオープンしました
／羽田拓也 8

西京銭湯部隊沸いてるんジャーの冊子ができました。
新人紹介
／松下藍子・中井翔太 9

創始者に聞く

／インタビューー 中川貴美子 10

メディア・ウォッチ

『近居』
／嶋崎雅嘉 11

まちかど

住吉団地 「巴型配置」のランドスケープ
／水谷省三 12



「生駒らしい景観」の本質に迫る計画づくり ～生駒市景観形成基本計画が策定されました

都市・地域プランニンググループ
／坂井信行・絹原一寛・依藤光代

奈良県の北西に位置する緑豊かな住宅都市・生駒市。平成23～25年度の3ヶ年にわたり「生駒市景観形成基本計画」の策定に関わりましたのでご紹介します。

「生駒らしい景観」を突き詰める

「〇〇らしい景観とは？」景観を考えていくにあたり必ず出てくるこの命題。景観法の制定後（あるいはそれ以前から）、規制の基準を定めて建築物を誘導することが景観施策の主要な柱の一つになっています。そもそも「なぜ景観を考えなければならないのか」「どのような景観が大切なのか」を理解しなければ、質の高い景観形成にはつながりません。そこで、この計画では「生駒らしい景観」について徹底的に考え、議論を重ねることとしました。

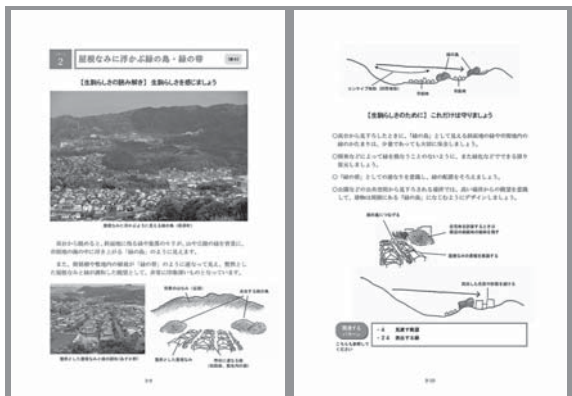
一般の人にも読んでもらえる生駒らしい景観

冒頭の章では、景観の背景にある歴史や人々の暮らし、生業、そこに息づく思い出などについてのエピソードを生駒に愛着を持つ市民や事業者の方々にお聞きしつつ、生駒らしい景観の特性を「地勢」「地域性」「暮らし」という3つの切り口から読み解きました。「一般の人にも読んでいただけるものに」という思いから、編集の仕事に携わっておられる市民のご協力も頂いて、読み物としても面白い内容になりました。

パタン・ランゲージによる生駒らしさ

本計画ではクリストファー・アレグサンダーが提唱した「パタン・ランゲージ」という手法を用いています。これは人々が「心地よい」と感じる環境の質（アレグザンダーはこれを「無名の質」と呼んで

います）をパタンとして抽出し、それらを組み合わせることで環境や空間をつくっていく手法です。先だってこの手法を使った計画をつくっていた神奈川県真鶴町などの例も参考にしながら、「生駒らしい景観」を構成する31のパターンを見いだしました。それぞれのパターンの中にある生駒らしさを写真やスケッチによって解説し、それを活かしてどのようなことに取り組んでいけば良いのかを示しています。これらのパターンを単語として文章のように組み合わせるとデザインすれば生駒らしい景観づくりが実現できるというしかけです。その道筋をいくつかの計画例として解説しています。



生駒らしい景観のパターン

難産の末に生まれた計画 (絹原 一寛)

この計画ができるまで、3年間にわたり延べ18回の会議を開催してきました。特に「パタン・ランゲージ」の部分は難産で、この部分だけでデザイン分科会を7回開催するという大変密度の濃い検討で、参画頂いた学識経験者の方々にも同じ問題意識からご尽力頂き、また市の担当者とも再三にわたる検討の場を持ち、ここまで到達しました。

近年は計画策定の期間も短くなり、じっくりと取り組むことが少なくなっていますが、これだけ腰を据えて景観に向き合い生まれたがゆえ、他にはないユニークな計画になっていると思います。長期にわたりご支援頂いた方々に感謝する次第です。

市民委員の方からは「パタン・ランゲージで示した章の内容に感動した。こんなふうにおオーダーメイドの



生駒らしさを読み解く



生駒らしい景観の31のパターン

生駒を読み解けるガイドブックはほかにはない。小学校でも高学年になると生駒市のことを勉強するので、教材としても使って欲しい。もっと景観を身近に考える機会になる」という言葉を頂きました。

「生駒らしい景観」を見いだして終わりではなく、この計画をどう使いこなしていくのか、が問われています。もちろん31個のパターンで完結するものではありません。この計画を通じて生駒のまちをより深く見つめる、そんな人が増えれば、基準や規制と言わなくても、自ずと生駒らしい景観が育まれるのではないかと期待しています。

読 み解きで見えてきた、奥深い生駒の魅力 (伊藤 光代)

生駒市は、ニュータウン開発が進み人口が急増した「ベッドタウン」というイメージがあります。しかしよくよく見れば、生駒山と矢田丘陵に囲まれた「生駒谷」には、昔ながらの集落があり、農地が広がり、今も心地の良い生活の場となっています。また地域の人から大切にされている「モリさん」(樹林)があちらこちらに点在し、景観にメリハリを与えています。

そんな生駒市の景観の「ちょっといいところ」を、「パタン・ランゲージ」の手法を使って丁寧に掘り起こしていきました。すると、生駒の景観がとてもユニークだということが明らかになってきました。計画の中でも紹介していますが、農家建築を主に手がける生駒の大工さんのお話で、棟梁が地形や方角、習わしなどを理解し、家屋に反映しているの二つとない家ができること、一方で、生駒の民家には配置や間取りには共通点があり、いずれもその土地



パターンを使った生駒らしい景観形成

の条件にあわせて理にかなったものであること、を教えてくださいました。民家一つ一つを建てる際でも、丁寧にその土地の景観を読む作法が実践されていたことを裏付けるものです。

この生駒の景観の味わい深さを多くの市民に気付いてもらい、「生駒らしい景観」として磨いていってほしいと思います。

使 い勝手を高めた「パタン・ランゲージ」 (坂井 信行)

もともと「パタン・ランゲージ」は設計者向けの環境創造の手法として開発されました。「美の基準」(真鶴町)も「川越一番街 町づくり規範」(川越市)も、主に作り手が使うことを想定してつくられています。今回の取り組みもそこから出発しました。

事務局が生駒らしい景観のパターンを初めて会議にお示した時、市民委員の方からこんな発言がありました。「これは私たちが生駒の景観を理解するのに使えると思う。」今から考えると、この発言は事務局に対して少なからぬインパクトを与えたと思います。「パタン・ランゲージは作り手だけでなく、それを享受する側にも役に立つものなのだ！」

より良い景観形成のためには、まずは身の周りの景観に目をむけ、理解することが必要になります。計画づくりの中で、パターンを生駒の景観を理解するための手引きにしようというコンセプトへと向かったのはむしろ自然なことでした。

もう一つ、専門家である設計者にとっても「パタン・ランゲージ」を使いこなすのは意外に難しいものです。それも乗り越えたかった点です。パターンの使い方を具体例として示したのはそのためです。実はこの部分が一番大変で、それが難産になった要因でもあったのです。

この計画は、いわば使い勝手を高めた「パタン・ランゲージ」と言えるかもしれません。

生駒市景観形成基本計画の全文をぜひホームページでご覧ください。

http://www.city.ikoma.lg.jp/keikan_masterplan/index.html



アルパックセミナー 都市における『農地を活かしたまちづくり』～都市と緑・農の共生に向けて～を開催しました（その1）

都市・地域プランニンググループ／岡本壮平・絹原一寛

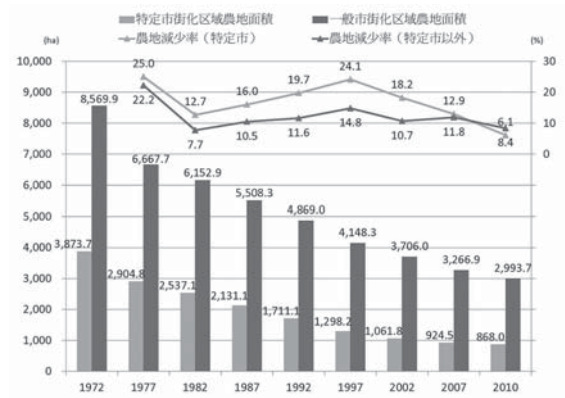
人口が減少に転じ、宅地需要の減少が見込まれる中、都市における農地のあり方についての議論が進んでいます。私たちとしても以前からこの問題に関心を持って取り組んでおり、ニュースレター※でもご紹介してきました。

このたび、複数の関連業務に関わった経験もあり、時宜を得たテーマとして世に問いかける場を作ろうということで、4月24日にアルパックセミナー「都市における『農地を活かしたまちづくり』」を開催したところ多数の方々にご参加頂き、関心の高さがうかがえました。紙面をお借りして、参加頂いた皆様、またご登壇頂いた皆様に厚く御礼を申し上げます。今号と次号の2回に分けて当日の様子と今後の展開についてご紹介したいと思います。

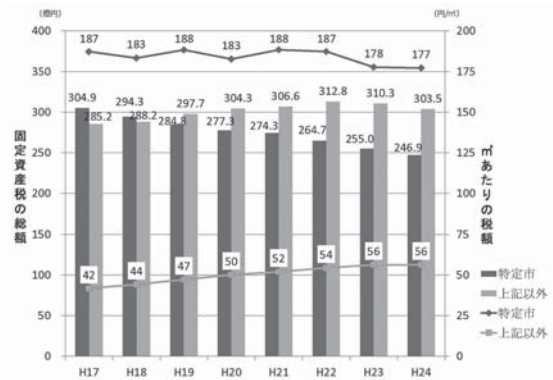
基調講演～地方都市における農地の現状と課題

基調講演には、本テーマの研究に造詣が深い熊本県立大学准教授柴田祐先生をお招きし、地方都市における農地を取り巻く現状や抱える課題についてお話し頂きました。

- ・都市における農地が政策の中でどのように取り扱われてきたのか、学会誌などに見ると、論述や法制度上の枠組みも変遷している。最近では農林水産省・国土交通省のそれぞれで都市農地のあり方をとりまとめているが、そのスタンスは微妙に違いが見られる。
- ・都市農地といっても地域差があり、制度面での支援策や利活用／開発のポテンシャルも異なるので、都市農地を一括りにして論じるべきではない。
- ・市街化区域内農地の面積は近年減少幅が緩やかになる一方、土地区画整理事業の実施面積も伸びが鈍化している。
- ・また、三大都市圏特定市では固定資産税が高止まりしている一方、特定市以外ではまだ上昇し続けている。
- ・首都圏と中部・近畿圏、地方圏では農地の保全・活用について相当の温度差がある。
- ・都市農地への関心が高まっている一方で、さまざまな論点が錯綜している状況であり、問題をどう解きほぐしていくのか、が大きな課題である。



市街化区域内農地面積の推移 (兵庫県)
出典：固定資産の価格等の概要調査 (兵庫県) をもとに柴田氏算出



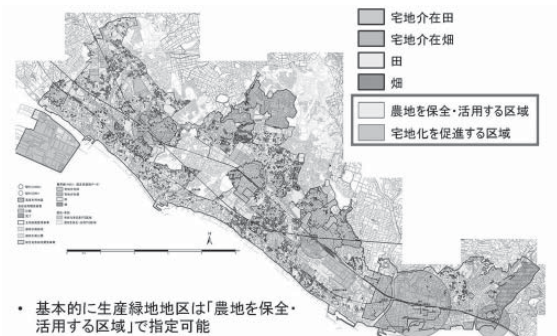
市街化区域内農地の固定資産税の推移
出典：固定資産の価格等の概要調査 (総務省) をもとに柴田氏算出

国土交通省「平成 25 年度集約型都市形成のための計画的な緑地環境形成実証調査」の報告

講演の後に、昨年度国土交通省で公募された標題の実証調査に取り組まれた兵庫県明石市と大阪府高石市からの報告を頂きました。この調査は、集約型都市構造化を推進する上で必要となる緑・オープンスペースの保全・確保や適切な土地利用転換を図るための新たな政策ツール等について即地的に検討する目的で実施されました。



当日の様子



・基本的に生産緑地地区は「農地を保全・活用する区域」で指定可能

明石市：保全農地と宅地化農地を区分した土地利用方針図（案）
出典：国実証調査成果より抜粋

明石市「農と共存した都市計画の手法検討による、緑あふれるゆとりある都市環境の創出」（都市計画課 神尾直治氏）

- ・明石市は神戸市の西に位置し、4,925haの市域の約8割を占める市街化区域内にも農地が分布・点在している。
- ・平成23～24年度に兵庫県で実施された市街化区域内農地の保全・活用に関する調査にも参画し、地元からの要望もあって、生産緑地地区の活用による市街化区域内農地の保全・活用を探っていたタイミングで本調査に取り組んだ（注：柴田先生とアルバックも本検討に参画）。
- ・検討の骨子として大きく3つ。1つは都市レベルで市街化区域を「宅地化を促進する区域」と「農地を保全・活用する区域」とに区分し、後者にのみ生産緑地地区の活用を認める枠組み。属人的側面が強い生産緑地地区制度に都市計画的な観点を持ち込み、マスタープラン等と整合させながら農地の誘導を図るもの。今後、合意形成を図りながら生産緑地地区指定に取り組んでいく予定。
- ・2つ目は、地区レベルで地区計画制度を用いて農地を含んだ市街地を誘導する手法の検討。モデル地区でのヒアリングを踏まえ、農業用通路などを地区施設として位置づけつつ、農地への悪影響を防ぎ日照や通風を確保するための市街地の形態規制や、面整備を伴わないライトな土地地区画整理事業などの手法を用いた枠組みを検討した。
- ・最後にソフトの仕組み、農地をいろんな主体が多面的に利用していくためのマネジメント（いわゆるBIDの農地版、AID（Agriculture Improve District）など）による、農地のまちづくり資源としての活用方策を提案した。



高石市「都市内農地を活用した緑と調和したまちづくり方策に関する検討」（経済課農水振興室 長田佳津彦氏）

- ・高石市は大阪湾に面した面積1,135haの都市であり、うち98%が市街化区域、その約半分が臨海工業地域という土地利用で、市街化区域内農地はわずか30haしか残っていない。
- ・三大都市圏内でもあり生産緑地地区制度を活用してきたものの、この20年で農地面積は半減、放置しては農地が消滅するとの危機感から、経済課農水振興室という専門部署を設置、市街化区域内農地の保全に積極的に取り組もうとした中で、本調査に応募した。
- ・市民農園の利活用について、市では、市民農園2カ所、福祉農園3カ所を開設しており、その利用をさらに広げていくために市民アンケート調査を実施、適切な価格帯や付帯施設の希望を今後の市民農園の量的・質的に拡充する予定。
- ・あわせて、学校生徒向けの学習会を開催し、農地の保全・活用についての理解を深める取り組みを行った。
- ・また、農地の持つ多面的機能、とりわけ防災機能が本当に有効かどうかを実証するため、農地の貯水機能を計測する実験や、延焼防止にどの程度役立つかのシミュレーションを実施した。後者については360分経過時の焼失棟数の割合が「農地あり」で29%に対し、「農地無し」で95%となるなど、「多面的機能」の効果や農地を保全することの意義を、実験を通じて客観的な指標で示した。
- ・この成果を農地所有者に報告し、高石市における農地の持つ意味、重要性について理解を図った。今後はこの成果を元に防災農地としての指定を進める予定。

次号では、この後のパネルディスカッション・意見交換の内容をご紹介しますとともに、今後の展開についても述べたいと思います。

※関連ニュースレター記事

- ・Vol.167「都市と農のよい関係～新たな都市計画を展望して」
- ・Vol.169「周辺市街地の土地利用マネジメント～非建築的土地利用の“状態”のコントロール～特集「まちづくりとエリアマネジメント」



ひと・まち・地域

地域の活性化×自分たちも楽しむ仕事=よい仕事？ ～平成 25 年度の業務 4 本から～

地域産業イノベーショングループ／原田弘之・武藤健司

できました！住民出演型の地域プロモーション動画ー大阪市住吉区「来てよし 観てよし 住吉区」ー

「たら～らら～♪♪ここは大阪 住吉区…」懐かしい感じのメロディで始まり、チンチン電車が走る情景、住吉大社の参道、住吉長屋の佇まい、大和川の夕陽が続き、タイトルとして「来てよし 観てよし 住吉区」。平成 25 年度、大阪市住吉区から受託した観光産業振興調査業務の中で、(株)バード・デザインハウスの協力を得て動画を作成しました。観光集客都市ではない住吉区が、観光の取組を進めるにあたり、住民の方が誇りに思う魅力を集め、それを区内外に発信していく



ためのツールです。巫女さん、住職さん、郵便局の職員、地域活動の方、お祭りの実行委員会の方、大学生など 20 名以上の住民の方が登場し、住吉大社、熊野街道、万代池、大阪市立大学、商店街などの住吉区の魅力を親しみを込めて紹介していきます。それを 1 つの音楽にのせてかっこよく 5 分程度にまとめました。まずは You Tube でご覧ください。

【参考】来てよし 観てよし 住みよし区

<http://www.youtube.com/watch?v=FSn1-rOJBow>



茨木のスイーツ店を食べ尽くせ！ ー茨木おもスイーツフェアー

平成 25 年度秋、大阪府茨木市主催の「茨木おもスイーツフェア 2013～秋だもん！さつまいも」の企画実施に関わりました。11 月 9 日～12 月 1 日の約 3 週間のスイーツラリーがメインイベントです。洋菓子店、和菓子店、カフェなど 27 店の茨木市内のスイーツ店が、茨木産さつまいもを使ったオリジナルスイーツを開発し、それを食べ歩くのです。期間中の当該商品の販売数は 6,000 超、全店制覇が 23 名、10 店制覇も 69 名とスイーツ猛者が相次ぎました。参加者からは「新しい店を開拓できてよかった」「スイーツのマップが手に入ってよかった」、お店からは「新商品開発や従業員のモチベーションアップにつながった」など喜びの声も上がっています。

さて、なぜ茨木で「さつまいも」なのでしょう？茨木市は人口 27 万人の大阪のベッドタウンですが、北半分は農地と山林が広がる田園

都市でもあるのです。平成 24 年には市民主導の取組として「茨木おもプロジェクト（宙いもプロジェクト）」が立ち上がり、さつまいもを通じて地産地消や食育活動、茨木名物づくりをめざして、市民や店舗のサポーターを募って、サツマイモづくりを開始しました。今回のスイーツフェアはこうした市民の盛り上がりとも連携し、それをスイーツ店にも波及させ、茨木を盛り上げていくために企画したのです。

【参考】茨木スイーツフェア

<http://ibaraki-sweetsfair.com/>



住民主体の魅力発信プロジェクト —大原野「地域ブランド」戦略—

京都市の「大原野」という地域を知っていますか。「大原」ではありません。よく間違えられます。西京区に位置する大原野は、寺社が多くのだかな田園風景が広がり、紫式部が愛した地域でもあります。「知る人ぞ知る、京都の隠れた観光スポット」というイメージの大原野ですが、平成24年度から、地域ブランド戦略の策定に向けた検討が行われており、平成25年度からはアルパックもお手伝いさせていただきます。

月に1回程度開かれる大原野「地域ブランド」戦略検討部会では、地域住民が主体となった5つのプロジェクトチーム(*)が発足し、魅力発信に向けて具体的な取組を進めながら議論を深めています。メンバーも固定的ではなく、知り合いを呼び込んでくるなど、どんどん輪が広がっています。

各チームは少額の活動費を有効



に活用し、特産品の試作、先進地の視察、フジバカマの定植や獣害防止柵を設置するなど、競い合うように取組が盛り上がってきています。今年度、西京区では、このような動きも踏まえながら大原野「地域ブランド」戦略を策定する予定です。魅力あふれる大原野地域のこれからの注目です。

*大原野の子どもと一緒に作り田園に並べる「かかし」、紫式部やフジバカマなど紫色をテーマにした「紫」、大原野の特産品である「たけのこ」、新たなこだわりの特産品開発をめざした「ごま」、「よもぎ」の5チーム

【参考】なんやかんや大原野

<https://ja-jp.facebook.com/anyakanyaDaYuanYe>

農家が一体となって立ちあがる！ 農産物のブランド化と販路開拓 —久美浜版 GAP 研究会—

京都府京丹後市の久美浜地域では、久美浜の農家（有志8名）が集まった「久美浜版GAP研究会」を組織し、従来のJAや個別契約に頼らず、より有利な販路をめざして、熱い議論が交わされており、その支援を行っています。

そこで他産地との差別化のツールとしているものがGAP (Good Agricultural Practice) です。GAPとは、農業生産活動の各工程を適正に管理することで、食品の安全性や品質の向上、環境保全、労働安全の確保等をめざす取組です。久美浜版GAP研究会では、その管理方法を「久美浜版GAP」として独自に定めた生産活動を行っています。

また、久美浜湾で育ったカキ殻を肥料として使う

など、久美浜の海・土・水の良い環境で育まれた農産物であることもアピールポイントです。

今年度は、農家のこだわりの技と心意気で生まれた久美浜ブランドの農産物として、共通ロゴなどのPRツールとともに、京阪神や首都圏などへと販路を開拓していきます。

【参考】久美浜まるごとプロデュース協議会

<http://kyotango.gr.jp/kumihama/>

久美浜版GAP憲章

■基本方針
食品供給者として安全と品質を追求するとともに、久美浜農産物の価値を向上させ対外的にPRすることを目的に、生産者が一体となり、法令遵守に加え、自らが定めた規範を遵守し取り組みます。

■行動指針

- 1 関係する法令等を遵守します。
- 2 久美浜農産物の安全と品質を高め、消費者の安全性を確保します。
- 3 生産者の健康被害や事故防止など、生産者の安全・安心に配慮して活動します。
- 4 持続的な農業生産活動に向けて、自然環境との共生・共存、生活環境に配慮した生産活動を行います。
- 5 その他、久美浜版GAP独自の取組として下記に努めます。
 - ・エコファーマーの認定、または、認定をめざした取組を行います。
 - ・肥料として、濃濃協の粉砕カキ殻を適正な方法で使用します。
 - ・丹後ジャージー牧場の堆肥を使用します。

制定日 平成26年3月24日
久美浜まるごとプロデュース協議会



きんきょう



ワークショップを通して広場の賑わいづくりを検討

生駒に新たな賑わいスポット「ベルテラスいこま」がオープンしました

地域再生デザイングループ／羽田拓也

多くの市民が集まる駅前複合商業施設がオープン

生駒駅前北口の市街地再開発事業が完了し、4月20日（日）に複合商業施設「ベルテラスいこま」がオープンしました。

駅からデッキで接続しており、広場「ベルステージ」が設けられ、開放感あふれる魅力的な空間となっています。

ベルステージでは、オープニングイベントの後も約1か月にわたって、様々なイベントが企画され、多くの方々が賑わいを見せています。

また、見晴らしの良い4階にある駅前図書室も子どもから大人まで様々な年代の方々が利用し、賑わいづくりの一翼を担っています。

有志が集まって賑わいづくりのイベントを検討

弊社は、昨年度ベルステージを活用した賑わいづくりを考え

西京銭湯部隊沸いてるんジャーの冊子ができました。

181号の記事で紹介しました、京都市西京区で唯一残っているお風呂屋さん「桂湯」を盛り上げるべく立ち上がった「西京銭湯部隊沸いてるんジャー」が、お風呂屋さんの「エエトコ・エエコト」や「お風呂の入り方」、「沸いてるんジャーの取組み」などについてまとめた小冊子「ええお湯沸いてますヨ！」を発行しました。ご関心のある方には差し上げますので、ご連絡下さい。



るワークショップを実施し、広場の使い方や必要な備品、使用にあたってのルールなどの検討をお手伝いしました。

ワークショップは終了しましたが、今も引き続き市民や市職員の有志が集まり、「市民が考えた4つのワクワクベルステージで楽しいことやってみよう！」と題し、6月中旬の開催に向けて市民が創る4つの賑わいイベントの準備を進めています。

4つのイベントは、ママが手づくりのものを出店するママと子どものためのマルシェ「iko mama まるしえ」、各家庭にあ

るプラレールを持ち寄り大きな線路を作って車両を走らせる「つなげてあそぼうプラレール!」、今各地で流行っている朝活としてみんなで体を動かす「朝一体操」、突然通行人がパフォーマンスをする「フラッシュモブ」を予定しています。

ふらっと立ち寄れたり、子育てママが集えたり、「ワクワクに出会おう!」をテーマに、ワークショップで検討してきたコンセプトのイベントが実施されます。

駅前の誰もが立ち寄ることのできる広場として、イベントそれぞれで違った広場での楽しみ方、広場の使い方を味わうことができると思います。お近くの方はぜひお立ち寄りください!

各イベントの詳しい日程等については、生駒市の広報「いこまち」（6月1日号）をご覧ください。

<http://www.city.ikoma.lg.jp/koho/>

○ベルステージについて

<http://www.ochiyasens-belleikoma.com/bellestage/>



オープニングイベントの様子

新・人 紹・介



「生活をみる」

都市・地域プランニンググループ ／松下藍子

今年4月からアルパックに入社いたしました、松下藍子です。都市・地域プランニンググループの配属になります。生まれも育ちも大阪ですが、大学・大学院の6年間を福岡で過ごし、就職を機に今年から大阪に戻ってくるようになりました。

大学では建築を学び、学部4年から修士の3年間は、集落研究を専門に行ってきました。卒業研究・修士研究と、佐賀県の干拓地に位置する農村集落の空

間構成についての研究を行いました。集落に通い、自分の目で観察し、居住者の方達から話を聞かせていただきながら研究を進めていく中で、地域から学ぶことが数多くありました。また、集落で営まれてきた生活と空間との対応関係に感動し、日々その奥深さ、面白さを感じていました。生活に目を向け、地域から学ぶ姿勢を大切に、地域づくりに取り組んでいきたいと思っています。

旅行が好きで、大学時代はカンボジア、インドネシア、韓国等、アジアの様々な国に行きました。

修士1年の時に公共住宅の調査で行ったインドネシアは、特に印象に残っています。6年ぶりに関西に戻ってきたので、今年は関西の面白い地域をたくさん見て回れたらと思っています。

社会人1年目は不安もありますが、いろんなことに興味を持ちながら学び、成長していければと思っています。宜しくお願いします。



「密集市街地の研究を通して」

都市・地域プランニンググループ ／中井翔太

はじめまして、今年度から大阪事務所の都市・地域プランニンググループに配属になりました中井翔太です。

大学・大学院では、「都市計画・まちづくり」について学んできました。中でも、「密集市街地の再生」をテーマに日々、研究活動に取り組んできました。密集市街地は建物が密集している地域を指しますが、別の見方

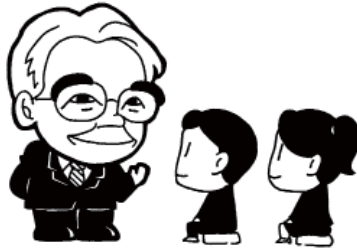
をすると、多くの関係者やそれに伴う意見・欲求が競合する地域であるとも言えます。このような場において、一つの方針を立てるには、地域課題の優先順位を整理し、まちづくりによるメリットを共有する等、途方もない労力が求められることを関係者の方々にお話を伺うことを通し、学ばせていただきました。これからはシンク&ドゥタンクを掲げるアルパックにおいて地域と密な関係を築き、課題に対し一緒に悩ませてもらえるプラ

ンナーになれるよう研鑽して参りたいと思います。

また、私、生まれも育ちも現在の生活拠点も奈良の農村集落。トラクターに乗り過ごす休日もあります。これからの都市近郊の営農のあり方についても興味があり、勉強していきたいと考えています。どうぞ宜しくお願いします。



「創始者に聞く」



一前回、「職能を絶えず問い続ける。ということが必要」とありました。私たちの職能とはなんでしょうか？

3年後に創業50年になります。その間、世の中の変化や仕事の受注の仕方、働き方も変わってきていることもあります。変わっていくことについては、その時々で先端を行けば良いですが、変わらない普遍の原理があります。

市町村の基本構想が議会の決議事項になって以降、都市計画から環境、福祉などあらゆる分野が法律に基づく計画行政となっています。そのため、昔に比べると多くの業務が行政から発注され、それだけをこなしていれば、食べていけるかもしれませんが、私たちの職能はそれで良いのでしょうか？

本来の私たちの職能の課題は、地域で何が起きているのかに目を向けることです。地域の人々が困っている問題、悩んでいる問題は全て、本当は私たちの責任です。注文に応じて計画書や報告書をつくれれば良いのではなく、地域での困りごと、悩んでいることに着目していかなければなりません。

一三輪さんの経験の中での仕事の仕掛けについてお話を聞かせてください。

関西文化学術研究都市の立ち

上げも、どこからか受託したわけではなく、京都大学の奥田東先生がローマクラブの「成長の限界」にショックを受け、これが人類の問題であると感じられ、奥田先生と河野卓男氏（ムーンバット社長）と私で、毎週1回会って、議論をしたのが始まりです。人類のために、日本が関西でイノベーションセンターをつくらねばならないということで、学会、経済界、各省庁に働きかけを始めました。私の役割は、各省庁への働きかけと事務局です。有識者の方は交通費、謝金なしで70名くらいが集まり、議論して頂きました。事務局として必要な経費は、アルバックが負担しました。

そのような責任からいえば、難しくても、「ようやらんわ」とは言えません。「実現するにはどうしたら良いか」ということを考えるのです。

一仕掛けの求心力やきっかけはなんでしょうか？

求心力は人物一人です。関西文化学術研究都市の時は、奥田東先生が求心力となりました。そのエネルギーはパッションです。

アルバックのストックを勘定しておく必要があります。関西文化学術研究都市の際も、奥田先生は、土地勘、地域情報を持っているアルバックを見込まれました。

アルバックは当初から、関西以外でも仕事もしていますが、そのきっかけは、知人や縁のある地域で、「知識のお土産」を持っていったことによります。情報を媒体として、人を媒体として広がっていけばどこまでも広がっていきます。

若い人は何をやっていったら良いかという、「どんどん知り合いを広げよ、厚かましくいけ、粘り強くいけ」それだけです。そして、知識のお土産を持っていき、広がっていくのです。



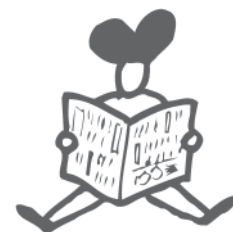
＜インタビューの感想＞

インタビューは、「現地主義、現実主義」とはどういうことか分かっているだろうか？というところからスタートしました。「全ての地域の悩んでいる問題は私たちの責任である。」という言葉を軸に、これからは地域と向き合っていきたいと思います。

インタビューー：
環境マネジメントグループ
／中川貴美子



『近居』
 少子高齢社会の住まい・地域再生にどう活かすか
 編著：大月敏雄+住総研
 出版：学芸出版社



紹介者／地域再生デザイングループ
 嶋崎 雅嘉

みなさんは、自分の親世帯とどのような距離のもと暮らしていますか？

一つ屋根の下で「同居」している方、同じ敷地内やマンション内で「隣居」している方、スーパが冷めない距離で「近居」している方、実家から離れた地域で暮らしている方、様々な生活スタイルがあります。

本書は、この中でも「近居」「隣居」というスタイルに着目し、近居に対する子世帯、親世帯それぞれが持つニーズや、近居の効果、近居を促進するために行われている行政施策の紹介等がされています。

本書中에서도紹介されている神戸市の「親・子世帯の近居・同居住み替え助成モデル事業」の実施に向けた調査はアルパックがお手伝いしました。その調査の中では、子世帯が近居・同居を選ぶ理由として「安心感」「緊急時のかけつけ」とならび「子育てを手伝ってもらうため」が多くあげられていることや、近居・同居の満足度が非常に高いこと、既にかかなりの比率で近居・同居が行われていることなどがわかりました。

本書においても、「近居等」の効果として、「母子家庭や共働き世帯における子育ての手伝い」「高齢の親世帯に対する家事援助・介護」といった福祉的な効果が評価されていると共に、「近居等」の促進により「緩やかな地域定住」「集落コミュニティの維持」といった地域再生に対する効果への期待も指摘されています。

一方で、これまでは一世帯一住宅を基本とした住宅政策が進められてきた背景から、「近居」

という居住スタイルについては政策的に扱われてこなかった面があり、その実態を示す統計データも十分で

はありません。しかし、人口移動が減少し都市が成熟するに従って、親子関係や地域内定住に注目し、メリットの大きい「近居」という生活スタイルを捉え直す必要があります。

本書においても、複数世帯のネットワークから成り立つ「家族」の住まい方をどのように評価し、住宅政策にどのように反映するのかという視点が今後の住宅政策では必要であると論じられています。また、一方で家族関係から切り離された人たちの存在に対する配慮が必要であるという指摘も重要です。

本書で紹介されている、哲学者ショーペンハウエルの寓話「ヤマアラシのジレンマ」の例えが印象的です。ヤマアラシのカップルは、暖め合おうと互いに近づくと針が刺さり、離れると今度は寒い。互いが傷つかずかつ暖め合える最適距離を見いだすという話です。

前世紀は「同居」がスタンダードであった家族のあり方が、「別居」を基本とした居住スタイルへ変化しました。近年は、「近居」というスタイルによって親世帯・子世帯の最適距離の再構築が進みつつあるように思います。





住吉団地 「巴型配置」のランドスケープ

都市・地域プランニンググループ／水谷 省三

住吉団地は大阪市住之江区の南海本線住吉大社駅から徒歩約10分のところに立地し、付近には、明治6年に開設された大阪でも最も古い公園の一つと言われる住吉公園があります。工場跡地につくられた面開発市街地住宅で、昭和43年につくられてから約半世紀、市街地の中でも豊かな緑と歴史に触れられる団地です。

外観上の大きな特徴は、主な住棟が「巴型配置」で計画されていることです。この配置により、適度に囲まれた空間が団地の中ほどに生まれ、同時に人の動線がそこに集まれるよう意図されています。実際に団地の中に広がる広場や通路などに立つと、大きな

庭のような空間で、周りから見守られている安心感があります。

また、近年の民間マンションには見られない、ゆとりある外構空間の中に豊富な緑を有することも空間的な特徴です。例えば、開発当初に植樹された樹木が時とともに大きく成長し、幹周りの太い樹木が樹林をつくっていたり、象徴的な高木による並木道など、季節を感じさせる豊かな緑環境が創り出されています。何よりも都市部の住宅地で、これほど多くの緑が間近にあることは、誇れる特徴といえます。時を重ね大切に育てられてきたからこそ醸し出されてきているものです。



団地内の豊富な緑地



建物の周りにおける成長した高木



緑と建物に囲まれた公園

UR 美団地・ヴィダンチ

「美団地 ヴィダンチ」は、UR 都市機構が日本住宅公団の頃から、長年団地づくりに取り組まれてきた団地の景観や魅力を紹介するホームページです。関西エリアの美団地サイトがリニューアルされ、新たに住吉団地も「美団地」の仲間入りをしました。

ホームページでは、団地改修や住民参加の取り組みなど、UR 賃貸住宅のリノベーション等に係わる取組がいくつか紹介されています。都市近郊で緑や自然豊富なまちに住み替えを考えておられる方や興味のある方は、ぜひ、一度ホームページをご覧ください。

(<http://www.ur-net.go.jp/kansai/vidanchi/index.html>)

arpak アルパック(株)地域計画建築研究所

Architects Regional Planners & Associates · Kyoto
<http://www.arpak.co.jp> E-mail info@arpak.co.jp

本 社

京都事務所 〒 600-8007 京都市下京区四条通り高倉西入立売西町 82
大阪事務所 〒 540-0001 大阪市中央区城見 1-4-70 住友生命 OBP プラザビル 15F
名古屋事務所 〒 460-0003 名古屋市中区錦 1-19-24 名古屋第一ビル 6F
東京事務所 〒 102-0074 東京都千代田区九段南 3-5-11 スクエア九段ビル 1F
九州事務所 (株) よかネット 〒 810-0802 福岡市博多区中洲中島町 3-8 福岡パールビル 8F

TEL(075)221-5132 FAX(075)256-1764
TEL(06)6942-5732 FAX(06)6941-7478
TEL(052)202-1411 FAX(052)220-3760
TEL(03)3288-0240 FAX(03)3288-0221
TEL(092)283-2121 FAX(092)283-2128



この用紙は「びわ湖の森を元気にする」
kikito ペーパーを使用しています。